重要伝統的建造物群。石で覆われた保存地区のシンボル　今（いま）　橋

江戸時代、倉敷は瀬戸内海から船の荷揚げ場として栄え、倉敷川は物資を運ぶ運河として利用されていました。現在の川幅は 10 mですが、当時は 20 m程あり 40 隻近い船が上り下りしていました。倉敷の美観地区に入ると、最初に目に触れる橋が今橋です。このあたりに人家ができた当時は木橋でしたが、弘化 3 年（1846）橋の南東に住んでいた和栗仁左衛門によって石橋に架け替えられました。今橋の名は、大阪今橋の鴻池長者にあやかりたいとの願いによっています。

大正 15 年（1926）、昭和天皇（当時は皇太子）の行啓に際し、今橋は道幅が狭い上に、架設後 80 年を経ているため、急遽橋の架け替えが行われることになりました。工事は大原美術館の創始者である大原孫三郎によってなされ、予算の 10 倍を超える工費がつぎ込まれました。また工期が厳しかったこの工事は昼夜兼行の突貫工事で、わずか 40 日で完成しました。

鉄筋コンクリート造りのアーチ橋を石で覆ったこの橋は、橋の長さ 10 m、幅 5 mという小さな橋ですが、欄干の両袖はゆったりと開き、荘重感あふれる優しい設計となっています。

20 面に区切られた欄干のデザインは、孫三郎とは旧知の間柄であった洋画家の児島虎次郎によってなされました。昇り竜の彫刻は、目出度いということと孫三郎が辰年ということでデザインされ、石柱の頂部には皇室の紋章である菊があしらわれています。また、欄干の龍も通路側は線彫りで、外側は浮き彫りの竜が彫刻されています。彫刻は地元をはじめ京都、大阪などから腕達者 12 人を集め、昼夜兼行で進めたおかげで期日までに完成しました。

この完成によって、初代今橋は 旧高砂町（現在の中央 2 丁目）に移されたため高砂橋と改められました。その後、昭和 42 年（1967）に倉敷用水や美観地区の整備によって現在の位置（美観地区南側）に移されています。

初代、二代目とも現役で倉敷川に架かる今橋は、美観地区になくてはならないシンボルとして親しまれています。

今橋
大原美術館前に架かる今橋は、大原孫三郎によって架け替えられた。デザインは児島虎次郎。

■位置図

昇り竜がデザインされた欄干

鉄筋コンクリート造りのアーチ橋を石で覆った橋脚
アーチ部の半円と水に映る半円で満月が見られる。

重要伝統的建造物群保存地区「倉敷川畔」
雁木と常夜燈が倉敷川の賑わいを彷彿させる